

「心豊かにいきいきと学び合う子どもの育成」
～自分の役割をプロデュースする活動を通して～

I. 主題設定の理由

本年度、山梨県金融広報委員会より、「金銭教育研究校」を委嘱された。「金銭教育」とは「ものやお金を大切にすることを通じて、お金や労働の価値を知り、感謝と自立の心を育てることによって、人間形成の土台作りを目指す教育」である。

「金銭教育」の研究に取り組むにあたり、学校教育目標、社会の要請、子どもの実態を鑑み、また、これまでの研究の成果を踏まえ、

- キャリア教育の推進
- 学習環境の構造化、教室前面の整備
- 授業における言語活動の重視（昨年までの校内研の発展）

という3つの柱をもち、研究を進めていくこととした。

II. 研究仮説

多様な集団の中で、そこにふさわしい役割を自ら選択・決断し、行動する経験を積み重ねることによって、子どもたちのキャリア発達が促されるだろう。

【自立には、多様な仲間との集団体験が必要である】

人は社会的な動物であるから、人の成長には群れて遊ぶこと（ギャングエイジ）が不可欠である。成長するにつれ、集団でのルールを知り、自己主張をしながら他者の主張にも耳を傾け、多様な考え方やふるまい方や妥協の手段を体験しながら自分を知り、様々な人々の存在や共存関係を理解できるものである。

【人は、自分自身の発達のプロデューサーである】

人は生涯の中でのさまざまな役割を全て同じように果たすのではなく、その時々での自分にとっての重要性や意味に応じて果たしていこうとする。それが自分らしい生き方（ライフスタイル）であり、社会における自己の立場に応じた役割を選択し、それを果たすことを通じて、「自分と働くこととの関係付けや価値観」（キャリア）が形成される。このようにして、自分に期待される複数の役割を統合して自分らしい生き方を展望し、実現していく過程がキャリア発達である。子どもには子どもとしての社会や自己のとらえ方がある。

【キャリア発達は、自己理解・自己決定・自己統制とコンピテンスの形成過程である】

ある時期における自己理解・自己決定・自己統制と、それを通して形成される有能さ（コンピテンス）が、次の時期のそれらの基礎となり、更にその後の段階へと続く。自己理解・自己決定・自己統制は、社会認識と自己認識の発達に基礎づけられている。社会をどうとらえ、その中で自分をどうとらえているかが問題である。

III. 研究内容

1. キャリア教育の推進。

- ① キャリア教育とはどのような教育活動であるかを共通理解する。そのために、講師を招聘して、2回の学習会を行った。
- ② 本校の子どもたちの実態を踏まえて、どのような力や姿を期待するかを明確にする。そのために、3年生以上で、キャリア発達アンケートに取り組んだ。
- ③ 現在行っている学習や活動を、キャリア教育の視点から見直し、位置付ける。そのために、随時、学習における子どもたちの姿を記録し、それを反映させたカリキュラムを学年ごとに作成した。
- ④ 「北小黒大豆プロジェクト」と題し、黒大豆の栽培を全校で行った。体験そのものや具体的な活動の中での話し合いを通じて、自らの考えを深め、自主的に行動する力や問題解決能力、人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力を身に付けるなどを活動の目標とする。6年生は、収穫したものを資本に、会社を立ち上げ、地域の販売所で販売するなどの活動に取り組んだ。

2. 学習環境の構造化。

- ① 「場の構造化」「刺激量の調整」「ルールの明確化」に則った環境づくり。そのために、教室前面の掲示物の取り外しと、授業の流れが一目でわかるためのインデックスの作成をした。

2. 授業における言語活動の重視。

IV. 研究方法

- ・一人一実践。全員が実践提案していく。
- ・授業研究は、2本。授業研究Ⅰ 4年 岡村澄人 教諭 道徳
授業研究Ⅱ 6年 雨宮 正 教諭 総合的な学習

VI. 研究の成果と課題

- 今年度の研究を通じて、キャリア教育は避けて通れない領域であり、金銭教育も学ばせる価値がある内容であることがわかった。
 - キャリア発達アンケートの実施・分析により、本校の子どもたちの実態が分かり、子どもたちの課題から実践をスタートさせることができた。
 - 一つ一つの活動・行事・取り組みについて、子どもたち一人一人が「私は～をやる」という目標・見通し・目当てを持てるようにするなど、教師がキャリア教育の視点をもって指導することで、これまでと同じ教育活動にキャリア教育としての意味を加えることができること、またそれらの経験は積み上げていけることがわかった。
 - 子どもたちのキャリア発達が促されているかどうか、一人一人の子どもの姿を読み取っていくことに難しさがあった。教師の観察も根拠となるが、自分をプロデュースする活動であるから、子ども自身が自己の学習や活動を振り返り、自己評価させたい。来年度はさらに、記録、ポートフォリオ等の取り組みを行い、子ども自身がどのように考えたかを表現させていくことを行いたい。
- また、今年度、子どもたちが書いたものを残し、「比較してみる」「発達段階に応じた目標（力）を洗い出す」等の方法も効果的であると考える。

（ 研究主任 岩森真由美 ）